

---

さくら

I f

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さくら

### 【Nコード】

N4053G

### 【作者名】

If

### 【あらすじ】

僕の初恋はある春の雨の日に、庭の桜の木の下に佇んでいた一人の少女だった。

僕の家の庭には古ぼけた桜の木がある。とは言ってもそれ程大きくはない。

だけでもその小さな桜の木は毎年綺麗な花を咲かせるので、僕は非常に愛着をもっている。

毎年その木が蕾をつけ始めた頃、僕はその木を見る度に思い出す。決して叶うはずのなかった、儚すぎる初恋のことを……。

あれは確か僕が十歳くらいになった頃だったと思う。

僕は母親からもうすぐ桜が咲くと言われて大いにそれを待ち焦がれていた。その頃から桜の真の美しさが分かるようになってきており、僕は毎日桜の木を撫でたりして春が来るのを心待ちにしていたのである。

そんなある日の雨のこと。

僕は両親が共働きでいないのをいいことにひたすらゲームをして楽しんでた。

しばらく遊んでいるとやがて飽きが来て、僕はふと家の外を見た。雨は思いのほか強く、僕は桜の蕾が心配になって窓に近づいた。

「誰？」

窓の外を見て、思わず首を傾げる。

雨の中、桜の下で桜色の和服を着た女の子が泣いているのだ。しかし彼女に見覚えはなく、そもそも家の桜の下にいてこと自体おかしかった。

かといってこの大雨の中に女の子をさらしておくわけにもいかないので、僕は彼女が誰だか分からないままそのずぶ濡れの女の子を

無言で家の中に入れた。

「ちよつと待つて。今着替え持つてくるから……」

男物しかないとはいえ、ずぶ濡れよちはいいだろう。僕は急いで二階に上がって自分の部屋から着替えを持って来る。

「はい、これ持つて来たから着て……」

僕が階段を降りた時、すでに少女の姿はなかった。女の子のいたところには奇妙な水の跡があるだけだった。

次の日、空は真つ青で昨日の雨がまるで嘘のようだった。朝一番で桜の木を見に行く。幸い、昨日の雨で蕾は落ちていなかった。と、木の幹の後ろに機能の少女の影を見つける。

「どうしたの？」

僕が木の背後に回りこむと、そこには昨日と同じ和服を着た女の子が少しばかり頬を朱に染めて立っていた。

「……その、昨日の……お礼に……」

「そうだ！ 何で昨日帰っちゃったの？」

女の子は目を合わせようとはせず、答えもしない。ただ頬を赤くするだけだ。

「……昨日は……ありがとう……」

「どういたしまして」

ふと気付いたのだが、この女の子、少しばかり成長しているような気がする。まさかとは思うが、一日でそんな成長するはずがない。気のせいだったらしいのだけど。

「そう言えば、名前、何ていうの？」

ずっと聞くのを忘れていた。知らないままなのも変なので僕は尋ねる。少女は少しばかり考えてから、やがて答えた。

「………ない」

「ない？」

名前がないとはどういうことだろうか。

「誰にも名前をつけてもらえなかった。だから、つけてくれる？」

「えっ？」

「君が、つけて」

彼女の言うことが信じられなかった。どうして昨日会ったばかりの人に名前をつけさせようという気になるのだろうか。

それでも頼まれた以上はつけてあげないといけないと思う。それも適当に考えてしまつては、彼女の今後に支障が出てしまう。

「分かった」

一応答えたものの、しばらく考えても名前なんか浮かんでこない。迷った拳句に視線を右往左往させるが、周りに名前になりそうなものは見当たらない。

困り果てて空を見上げる。

視線を上を持って行って、目に留まったものが一つ。

なんだ、こんなに近くにあつたじゃないか。

僕はそう思いながら視線を再び彼女に移す。

ピタリだ。

心中でその子に名前を当てはめて確認する。こんなに名前と容姿が一致する子もない。その花が皆に好かれているように、この子も誰からも好かれるようになるに違いない。

「……決めた」

そう言うとき彼女は目を輝かせる。嬉しいな。僕なんかが決めた名前でも喜んでくれるんだ。

わざとらしく一拍開けてから、ゆっくりと口を開く。

さくら

それがこの子の名前だ。

不思議なことに、さくらは日を追う毎に少しずつ成長していった。

いるような気がした。とはいっても確信をもってそう言えるのではない。目に見えて成長しているわけではないのだが、どこことなく大人びて見えるのだ。

もう一つ不思議に思うのが、彼女の服装である。彼女は僕に会う度に毎回同じ桜色の和服を着ているのだ。

「そう言えばさくらって洋服は着ないの？」

ある日、疑問に思った僕がそう尋ねると、さくらは「洋服？」と言って首を傾げてしまった。まさか冗談だろうと僕は思ったのだが、それはどうやら本気であるらしく、彼女は一体何者なのかと首を傾げた。

僕がさくらの正体を疑い始めたある日のこと。

外が雨だったので僕は桜の木を気にしながら外に立っていたさくらを家に招き入れる。それにしても雨の度に彼女が傘を差していないのも気になる。今日だって朝から雨が降っているのだから、家を出るときに傘を持ってこられるはずである。

しかしそれを気にしながらも僕はあえて触れず、彼女を僕の部屋に連れて行って着替えさせた。その後二人でベッドに腰掛けながら会話して楽しんでいると、突如玄関の扉が開く音がする。

「ただいま」

階下から母親の声がする。珍しく仕事が早く終わったようだ。家に友達を上げていることを伝えようと、ベッドから立ち上がったその時、突如母親の怒鳴り声が僕の部屋まで鳴り響いてきた。

「ちよつと下りてきなさい！」

怒られる理由が全く身に覚えがない。僕は首を傾げながら母親の元へと急ぐ。

玄関に母親が立っていた。怒りの表情で仁王立ちしていた彼女は二階へと転々と続く水の染みを指差す。

「どうしたの！　こんなに濡らして……」

さくらを家に入れた時に出来た染みだった。すぐに気付いて消しておくべきだったのだ。これでは友達が上にいると言ってもいい思いをしないだろう。

「もしかして、犬や猫を拾って来たんじゃないでしょうね？」

母親はそう言う。というのも、僕が小さい頃に時々捨て犬や捨て猫を拾ってくるのがあったからだ。

「いや、友達が来てるんだけど……」

「友達？ 嘘おっしやい！ 雨の日に傘を差さないで遊びに来る友達がありますか！」

いると言ってもおそらく信じてもらえないので僕は閉口する。

その時、上でガタツという物音がした。それを聞き取った母親は階段の手すりに手をかける。

「上にいるのね！」

瞬間的に母親の前に立っていた。いくら友達といえど、それが女の子であれば事情が変わってくる。

母親は部屋に行くのを阻もうとする僕を押しつけ、部屋へと向かう。そして部屋のドアノブに手をかけた。

もう間に合わない。

追いかける気力もなくなつて、僕はゆっくりと開かれるドアを眺めていた。母親は僕の部屋を首を左右させながら見回す。しばらくそうして、やがて彼女は呟いた。

「……何もいないじゃないの」

そんなバカな。

僕はゆっくりと部屋に向かい、ドアから部屋を覗く。

いないわけではない。

ドアの目の前に、さくらはいる。

青ざめた表情で……。

まさか。

母親には彼女が見えていないのか？

目の前にいるのに、僕と大して身長が変わらないさくらだけ見え

ていないのか？

刹那的にある考えが脳裏を過ぎる。

それなら今まで疑問に思っていたことの説明もつく。

何で毎服装が同じなのか。

何でこんな短期間でさくらが生長した気がしたのか。

何で雨の日に傘を差さずに、僕の家の中にいたのか。

さくらは母親をすり抜けて階段を降りていった。

僕は彼女を追いかけてようと思ったが、母親に奇妙に思われるので

その場に留まる。

母親は僕の挙動を訝しげに見つめていたが、やがて階下を下っていった。

それからしばらくの間、さくらは姿を見せなかった。

やがて、我が家の桜は綺麗な花をつけた。

本当は待ち望んでいた桜の開花なのに、僕はなんだか物足りなかった。

僕の隣に、桜の木陰に、あの少女の姿がない。

桜色の和服を着た僕と同じくらいの背丈の少女が。

この光景の中にさくらを投影して見る。

淒く絵になる。想像ではなく、本当に見てみたいと思った。

しかし、それが実現することはなかった。

やがて短い期間咲き誇っていた桜の花も少しずつ散り始めていた。この時期になると非常に鬱になる。桜が散っていくのが寂しいのだ。これからまた一年間この花とは会えなくなる。更に今回はさくらの一件もあつたのでショックが大きい。彼女は今、何をしているのだろうか。

そんなある日、雨が強く降った。桜の散り具合からも、今日で終



わりだろうという気がした。

最後に一目だけ一年間見られなくなる桜の花を見ようと、窓から桜の木を覗いた。

瞬時に僕は目を疑う。

庭の桜の木の前に桜色の和服を来た少女が倒れているのだ。

間違いない、さくらだ。

刹那的にそう理解し、僕は雨なんかお構いなしに庭に出た。

さくらに駆け寄り、彼女を抱き起こす。

呼吸が荒かった。体温も少しばかり高い。

きつと、この雨のせいだ。

桜の花が冷たい雨のせいで散ってしまう。桜の化身であるさくらが重病なのも納得がいく。

「さくら、大丈夫か？ さくら……」

体を揺さぶって何度か呼びかけると、彼女は薄く目を開いた。

「どうした！？ 僕がなんとかしてやるからな、もう少し我慢しろ！」

何が起きているかを僕は理解していた。それがもうどうしようもないことも。

「ずっと会いたかったんだ。どこに行ってたんだ？ さくら……」

ずっとここにいたことを僕は知っている。けどさくらは人に化けることなく、『桜』で居続けた。僕に彼女が人ではないことを知られないように。いや、もしかしたら母親の一件で僕がさくらの正体に気付いたことを知っているのかもしれない。だから、僕を欺くのが申し訳なくて、彼女は人に化けることをやめたのだろう。

「……お礼……しないと……」

さくらは息を荒くしながら途絶え途絶え言う。

「……大事に、大事に……何度も、何度も撫でてくれて……ありがとう」

僕がさくらを撫でた覚えはない。僕は桜を撫でていた。

「私に優しくしてくれる人がいなくて……いつも一人だった。君は

私の……最初の、最後の、私の友達……」

「そう言っなよ」

僕はさくらの髪を優しく撫でる。初めて触れたのに、この感触がひどく懐かしく、愛おしかった。

最初さくらを見た時は、不思議で仕方がなかった。だけど彼女と何度が触れ合っていくうちに、僕は人生で初めての恋をしていた。相手が人でなくても構わない。僕はさくらに恋をしたんだ。

さくらの腕がだらりと垂れ下がる。もう余力も残ってはいないのだろう。

温かい雨が頬を伝う。その雨のせいで、視界が霞み始めていた。

「なあ、また来年も来るんだろう?」

さくらは力なく頷く。

「……努力して、また来るよ……」

「ああ。来てよ! 待つてるから……」

僕は優しく彼女を胸に抱いて耳元で囁く。

「……大好き」

「さくら?」

僕はさくらを見つめる。

彼女は精一杯僕に微笑みかけていた。そして、そのまま動くことはなかった。

やがて淡い光が彼女を包み、さくらの身体は僕の手からこぼれていった。

雨がひどくなる。その雨はしばらく止むことはなかった。

春。

命の息吹を感じながら僕は庭に立つ。

さくらはその後、僕の前に出てくることはなかった。

だ、けど桜の木を撫でていると、不意に彼女を感じることがある。  
春になると、桜色の和服を着た少女はいつまでも当時の姿のまま  
で、庭で僕に微笑みかけている。

（後書き）

最後の段落は『僕』の回想だという風に伝わったでしょうか？もし伝わっていなければ、どうすればいいか教えてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4053g/>

---

さくら

2010年10月8日15時34分発行